

コロナ禍 首相響かぬ言葉

3人の専門家に聞く

新型コロナウイルス対策の外出自粛などを巡り、菅義偉首相の発信が、なかなか国民に響いていない。「紙を棒読みし、覚悟が伝わらない」のが一因とも言われるが、専門家は首相の言葉に若者の心を動かすような工夫がないことや、政策決定の不透明さ、政治家としての信頼度の低さも響いていると指摘する。

(鈴木誠)

菅義偉首相の言葉は国民に届かない？

感染を減少傾向に転じさせるために緊急事態宣言を決断した。もう一度、皆さんに制約のある生活をお願いせざるを得ない(7日)



昨年4月の緊急事態宣言後と比べた再発令後初の週末の人出は？

渋谷駅	2.5倍
新宿駅	2.7倍
横浜駅	2.8倍

※昨年4月11日と今月9日の午後3時台を比較。ソフトバンクの子会社アグープのデータより

首相の呼び掛けは十分な行動変容につながっていない

要因は

- 若年層に響く工夫の不足
- 政策決定の不透明さ
- 首相への信頼度の欠如

「上から、こうしなければならぬ」と唱える。他人が利益を得られないという言い方では、若者の行動抑制につながらない」。

東大大学院の渡辺努教授(マクロ経済学)は、首相の13日の記者会見での「国民、国、自治体と同じ方向に向かって、制約のある生活を乗り越えなければならぬ」との発言を問題視する。

渡辺氏らが昨年の緊急事態宣言時の国民の行動を分析したところ、宣言の効果よりも、感染を恐れるなど自発的な判断の方が外出抑制につながっていた。その後、若年層は無症状や軽症が多いと分かってきた。渡辺氏は「若者が感染を怖がらないのは当然」で、首相がただ自粛を求めるだけでは響かないと語る。ではどうすればよいのか。渡辺氏は「キーワードは利他心」

首相も7日の会見で「両親や祖父母、家庭、友人など大切な命を守るために自身のことと捉えて行動を」と述べたが、この一回きり。渡辺氏は「内容が具体的になければ心に刺さらない」と苦言を呈す。

首相の会見が「科学的なデータより、専門家の権威に頼って政策を説明している」と指摘するのは、早稲田大意思決定研究所の竹村和久所長だ。首相の会見には最近、政府分科会の尾身

茂会長が同席し、代わって答弁する場面が目立つ。

竹村氏は、重要なのは可能な限り意思決定過程を公開し、緊急事態の根拠や今後の見通しを示すことだと指摘する。政府は分科会などの議事録を作成せず、情報公開に消極的で、竹村氏は「政策の根拠となった情報の開示がないから、政治家の言葉は信用されない」と話す。

感染症対策で国民に行動変容を求めるには「リーダーへの信頼度が大事」と主張するのは日本大の福田充教授(リスク・コミュニケーション)。首相が自ら会食自粛を呼び掛ける中でステークス会食に参加したり、国民に説明する場の会見を途中で打ち切ったりしたことで批判を浴び、福田氏は「首相の言動が弊害になっている」とみる。

内容に具体性ない

情報公開に消極的

自身の行動弊害に

首相は、感染対策を徹底するため特別措置法などを改正し、時短命令を拒んだ事業者や入院を拒否した感染者への罰則を盛り込むことを目指しているが、福田氏は「今は国民と向き合っ

て丁寧な説明を尽くすことが必要」と訴える。